

頼朝の道

2017年3月3日

2018年12月画像追記

我部山民樹

房総各地には頼朝伝説が多いので、以前より頼朝が辿った道に興味があった。最近、学生時代のクラブの仲間から、「頼朝の旅」を数人でやっているが、一緒に行かないか」と誘われたので、参加することにした。頼朝が実際に辿った道を歩くのだろうとの思い込みがあって、「図書館調べ講座」の時に「頼朝の道」を検索した。直ぐに検索できるだろうと安易に考えていたが、何も検索されないで、図書調べ講座担当の松本さんに相談した。」千葉の道 千年物語「を探して頂いた。



頼朝が実際に辿った房総のルートが明確でないことが分った。それで図書館の

資料を活用して、自分で調べることにした。後で、仲間の立ち寄り先は頼朝ゆかりの地を巡ることが分った。

司馬遼太郎の著書『街道を行く三浦半島記』では、房総半島の南端の竜島（現鋸南町）より、船で北上したかのようにであると記している。『千葉の道千年物語』（千葉日報社）では船で太平洋岸を北上したらしいと記している。

高橋美雄氏の著書『上の細道 郷土の伝説と史跡を探る』によれば、『恐らく鴨川辺りから、3 隊に分かれて、1 隊は東京湾側を船で北上、1 隊は太平洋側を船で、もう 1 隊は内陸を北上したとのだろうが、その後は明確ではない。』とある。そうだとしたら、頼朝の辿ったルートはどれなのだろう。頼朝伝説が、房総各地に残っているので、3 ルート説も頷ける。

笹生浩樹氏の『房総の頼朝伝説』では、『鴨川から、古代の官道を北上し、富津市に出た。』と考えるのが妥当。そして『佐貫、百坂、三百坂を抜け、現在の君津市の寒（さえ）神社あたりで二手に分かれた。海岸部と山間部に分かれ、頼朝本体は鎌倉街道を進み、御所覧塚あたりで合流し、北上した。』と推測している。所要時間からして、陸上説が果たして妥当なのか？鎌倉に到達する速さ（9 月 13 日に南房総を出発し、10 月 6 日に鎌倉入りしている）を考慮すると、どうやら本体は舟で北上したらしいが、所要時間や明確な立ち寄り先を考えると太平洋岸では無く、ルートは東京湾側ではなかろうか。分隊が陸地や太平洋側で北上し、情報攪乱する為、それぞれのルートに頼朝を名乗る人物がいたので、房総各地に頼朝伝説ができたのではなかろうか。

頼朝の辿ったルートを特定する決定打はない。
以下の資料を参考とする。

・街道をゆく 三浦半島記

司馬 遼太郎

・千葉の道 千年物語

山本 光正 千葉日報社

・源平合戦と千葉氏

千野原 靖方

・上の細道 郷土の伝説と史跡を探る

高橋 美雄

・頼朝と関東の御家人

千葉市立博物館

・房総の頼朝伝説

笹生 浩樹

これら書物のベースは次の資料のようである。

・平家物語

・吾妻鏡

・義経記

・源平盛衰記

・千葉大系図

1. 頼朝挙兵のきっかけ

1180 年 4 月の以仁王の‘平家追悼の令旨’

2. 成功の鍵

・三浦氏、房総のNo.1 勢力の上総氏、No.2 勢力の千葉氏の 3 大豪族の動きいかにあった。当時、伊豆半島、三浦半島、房総半島の中で、房総は圧倒的な勢力であった。

千葉氏は平治の乱で佐竹氏に奪われた土地を取り返すために頼朝に賭けたのだろう。平治の乱の余波である。

・関東の独立宣言をして、武士による土地の支配を保証する‘安堵’をしたことが功を奏した。

東国の武士団が自ら開墾した土地を中央集権や敵対勢力から守るために、後ろ盾となる源氏を担ぎ上げたことが、頼朝挙兵の成功の鍵と言える。

3. 立ち寄り場所の時系列

- ・1180 年 8 月 17 日 以仁王の平家追悼の令旨を受けて挙兵。 蛭ヶ小島（現菰山町）より挙兵し、相模に進出
伊豆国目代の山本氏を攻めて成功する
- ・1180 年 8 月 23 日 小田原の石橋山（早川駅と根府川駅の間にある丘陵）で平家の大軍に敗れる。山本氏他の平家方に敗れる。
（三浦氏が悪天候のせいで海上を渡れなかったことにより遅延したことが敗戦の原因）
- ・1180 年 8 月 26 日 畠山氏、川越氏らが衣笠城を攻める。三浦義澄らが城を捨てて安房へ





石橋山古戦場（小田原市）

- ・ 1180 年 8 月 28 日 真鶴岬から海上に逃れ、安房に向かう
- ・ 1180 年 8 月 29 日 房総半島の南端の安房国、竜島（現在の鋸南町）に上陸する。このあたりの小勢力の安西氏に寄せる。頼朝が幼少時に昵懇の仲であり、三浦氏の娘婿。



頼朝上陸地龍島（吾妻鏡より）



頼朝上陸地記念碑

（義経記では、三浦を目指したが、房総南端の洲の崎に上陸とある。さらに‘千葉市郷土博物館誌資料’によれば、洲崎辺りに上陸したのだろうとある。潮の流れを考慮すると、ここらに着くらしい。これが事実かも知れない。）



- ・ 1180 年 9 月 01 日 北条時政らの意見によって、とりあえず上総介広常（外房の一宮町）のもとへ。
三浦氏居城の衣笠城落城。三浦義明戦死。
- ・ 1180 年 9 月 03 日 平家に志を通ずる平北郡住人長狭六郎常伴が頼朝
止宿の民家（鴨川市）を襲撃しようとする
- ・ 1180 年 9 月 04 日 三浦義盛が常伴を破る。
頼朝は安西景益の館に身を寄せる。
上総広常に迎えに来るようにとのことで安達盛長を
使者として送る。
- ・ 1180 年 9 月 05 日 洲崎神社参拝。使者の無事帰還と吉報を祈る。
- ・ 1180 年 9 月 06 日 和田義盛戻る。広常は千葉常胤と相談してからと。
- ・ 1180 年 9 月 09 日 安達盛長が戻り、千葉氏味方の吉報を伝える。
- ・ 1180 年 9 月 11 日 丸の郷の丸五郎信俊の案内により丸の御扇（みくり
や、現安房郡丸山町）を巡見
- ・ 1180 年 9 月 12 日 洲崎神社へ神田を寄進
- ・ 1180 年 9 月 13 日 安西館（鴨川市）を出立。300 騎を率いて下総に向
けて出発（関東の支配と独立を宣言。）
- ・ 1180 年 9 月 15 日 （袖ヶ浦地方に現れ、白幡の東側にある望陀（もう
だ、現木更津市）の八幡神社に集結し、兵を集めな
がら北上したと推測している。（袖ヶ浦郷土史より）
- ・ 1180 年 9 月 17 日 市川市国府台で 300 騎を率いて参陣してきた千葉常
胤と頼朝が対面。常胤が‘源義朝が一時居館した鎌
倉入り’を勧める。
- ・ 1180 年 9 月 19 日 隅田川まで進んだ時に、やっと上総介広常が公称
2 万騎の大軍を率いて参上
- ・ 1180 年 9 月 28 日 武蔵国を前に、敵対する江戸重長に使者を出す。

- ・ 1180 年 10 月 02 日 大井川・隅田川を渡り武蔵国に入る（亀有から墨田に向かう。隅田川左岸の微高地を通る？）
- ・ 1180 年 10 月 03 日 頼朝の命で、以北庄司常仲（頼朝を襲おうとした長狭常伴の甥）を攻撃
- ・ 1180 年 10 月 06 日 念願の鎌倉に入る（墨田宿から武蔵を経て）
- ・ 1190 年 11 月 19 日 上洛し、法王と面談する

その他

- ・ 安房神社

安房国一乃宮の安房神社が館山市にある。頼朝が祈祷を命じ、神田を寄進している。立ち寄ったという記録は無い。



安房神社

- ・ 館山城

因みに、里見八犬伝で有名な館山城が市内にあるが、里見義頼が 1580 年に築城したので、この時代には無い。



模擬天守

頼朝伝説

- ・「竜島のサザエ」

頼朝が上陸時、サザエの角を踏みつけ足を痛めた。‘竜島にサザエあるとも角出すな’と叱ったので、角の無いサザエが多いと。



- ・筆掛けの槓

千葉日報社の房総の歴史街道を旅する千葉の道千年物語」に寄れば安房に到着後、船を使って、太平洋側を北上したようである。太平洋側の大原町に、「筆掛けの槓」の頼朝伝説がある。

- ・仁右衛門島

長狭常伴が頼朝に夜襲をかけたときに、太平洋側の仁右衛門島（鴨川市）に難を避けたと伝わっている。（事実と思われる）



源頼朝隠れ穴

現島主の先祖が、源頼朝が安房に逃れてきた際にかくまったと言われる洞窟。

- ・御所覽塚

市原市の椎津山近くの鎌倉街道沿いに 5m程の高さに盛り土をした御所覽塚が残っていて、頼朝がここで兵に謁見したと伝わっている



御所覽塚

- ・切替家

立野（現姉崎）の豪農、長右衛門家に立ち寄り、裏山に洲崎神社（すのさき）の分霊を安房乃洲神社（あわのす）に奉納し、戦勝を祈願した。裏山の竹で、旗竿を新しく替えさせた。これにより’切替（きりかえ）’の姓を賜ったとされる。切替家は市原を代表する名家で、昭和 30 年頃？に、天皇家の宮様も立ち寄られたことが有る。その時の写真を郷土誌で見た記憶がある。

- ・飯籠塚（えごつか）と白羽根の地名

望陀（もうだ。現木更津市）の八幡神社に集結し、兵を集めながら、北上したとある。

この台地の手前に‘飯籠塚（えご）’の地名が有るが、村人が頼朝に飯籠を差し出したことに由来すると。また、白鳥が羽根を落としながら、頼朝を案内したので‘白羽’の地名が付いたと。（袖ヶ浦の歴史による）

また、富津方面に百騎坂、千騎坂、万騎坂と（現まん坂）との地名が有り、軍勢が増え、大軍になる経緯を物語っているとしている。

- ・幕張の地名

頼朝が千葉氏を頼って、千葉館（猪鼻、現千葉城）に入る。仮館に移り、幡流、幕百張を張り、諸勢を指揮し、幕張の地名が付いたと。（千葉伝記考）



猪鼻城跡碑



現千葉城

- ・ 逆さ銀杏

飯香岡八幡宮（いいがおか）に頼朝が植えたと言われる逆さ銀杏がある。

4. 豪族のその後

- ・ 北条一族

北条 時政は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての武将。伊豆国の在地豪族の北条時家か北条時方の子。源頼朝の正室・北条政子の父。鎌倉幕府の初代執権。家系は桓武平氏平直方流を称する北条氏であるが、直方流は仮冒で伊豆国の土豪出身という説もある。

東国の最大勢力として頼朝挙兵を助ける

上総常澄の子。房総平氏の当主。上総介（上総国府の長）として上総、下総を治めた東国最大の勢力。頼朝の父は東独に派遣され上総御曹司と呼ばれたように源氏との関係は深く、先祖の平常長は源頼義、義家に従い前九年の役、後三年の役を戦い、広常も保元・平治の乱において義朝とともに戦った。石橋山の戦いに敗れた頼朝が安房国において再起を図り、広常の元に参陣を促す使者（和田義盛）が送られる。広常は上総の平氏方を平らげ2万騎の大軍を率いて頼朝のもとへ参陣した。この時広常の心中には「頼朝の器量を見極め、器量が及ばなければその場にて討とう」という「二図の存念」を持っていたが、遅参を叱咤した頼朝の毅然とした振る舞いに感心し恭順したと『吾妻鏡』は伝えている。頼朝挙兵の最大兵力として活躍した広常であったが、1183年（寿永2年）謀反の疑いにより頼朝の命を受けた梶原景時によって暗殺された。

時代 平安時代末期

生誕 不明

死没 寿永2年12月20日（1184年2月3日）

別名 介八郎、平広常

墓所 横浜市金沢区朝比奈町の五輪塔？

官位 上総権介

氏族 桓武平氏良文流、房総平氏、上総氏

父母 父：平(上総)常澄

兄弟 伊西常景、印東常茂、匣瑳常成、佐是円阿、
大椎惟常、埴生常益、天羽秀常、広常、
相馬常清、臼井親常、時田為常、金田頼次

子 能常、平時家室、小笠原長清室

- ・三浦氏は頼朝に十分に優遇され、北条氏と並んで権勢の座についていたが、頼朝没後、北条時頼にからめとられ、一族のほとんどが討伐された。

三浦義明は

三浦義継の子。三浦荘の在庁官人。桓武平氏の一族。源氏累代の家臣として東国に下った頼朝の父義朝を助け、子の義澄とともに保元・平治の乱でも義朝に従い戦う。娘のひとり義朝の側室ともなった。配流中の頼朝とも交流を保った。頼朝が挙兵すると即座に一族を挙げて参戦。頼朝の元に向かうも石橋山の戦いに頼朝が敗戦し、衣笠城に籠城。畠山重忠らが率いる平氏勢に攻められると「頼朝を助けるように」と義澄ら一族を逃し独り奮戦の後敗死した。鎌倉幕府を開いた頼朝はその功を生涯忘れることなく満昌寺を創建し菩提を弔った。三浦一族は幕府の有力御家人として大きな勢力となり、長男の杉本義宗は和田氏の祖となった。しかし北条氏との権力争いに敗れ滅亡。後に傍流の佐原氏により再興され戦国大名の相模三浦氏となる。

- ・千葉氏は幕府の有力な御家人として下総に君臨し続けた。後北条氏（小田原）の傘下で、秀吉に滅ぼされるまで、家系が続いた。

千葉氏とは

千葉氏は平安京をつくった桓武天皇の血をひく「桓武平氏」の一族で、中世の房総半島を中心に栄えました。

平安時代末期、千葉氏の惣領であった「千葉介」は、下総国（千葉県北部から茨城県の一部）の在庁（国府に出仕する地方官僚）としての「介」を称した千葉庄を本拠とする地方家族で、平家に敗れた源頼朝を同族の上総権介広常とともに、挙兵から一貫して協力したことで頼朝の信頼を得、鎌倉幕府の成立後には東北から鹿児島にいたるまで、全国各地に領地を与えられました。

千葉一族は「妙見」という神を信仰し、移り住んだ全国各地の領地に妙見神を祀りました。妙見は北極星（または北斗七星）を神格化したもので、もともとは「尊星王（そんじょうおう）」という大陸から伝えられた神様です。千葉一族の代表的な定紋である月星紋や曜星紋は妙見を表しているとされます。

- ・畠山重忠は声望を妬まれて、北条氏の罠にかかり、討伐を受けて滅んだ。

重忠が二俣川で打ち取られる前の出来事

元久元年(1204)に実朝の結婚に関することで京都に派遣されていた畠山重忠の子である六郎重保は、武蔵前司平賀朝雅の屋敷で酒盛りが行われている席上にて朝雅と口論となり喧嘩となります。これが重忠が打たれるきっかけとなるのです。北条時政の後妻の牧の方は、自分の娘の婿にあたる朝雅が重保に悪口されたことを根にもって重忠父子を殺そうと時政に相談します。時政は北条義時と義房に重忠が謀反を企てているので討ち取るように勧めるのです。しかし義時は重忠が謀反を起こすはずは無いと事を進めようとはしないので、牧の方の兄大岡時親が義時に催促し、義時は返事に従う事になります。やがて稲毛重成に誘い出された畠山重保は由比ヶ浜で殺されてしまいます。このとき重忠は菅谷の館を百三十騎ほどの軍勢を従えて鎌倉を目指して出発していたのです。

- ・和田氏は豪勇で羞恥心が強かった。性格を熟知している北条氏はあえて処罰を与えて憤激させた。和田氏はにわかに市街戦を起こして討ち死にした。北条氏はこのようにしてライバルたちを消し去ったのか？

鎌倉幕府創業の功臣であり侍所別当の和田義盛は二代執権北条義時に度重なる挑発を受けて、姻戚関係にあった横山党や同族の三浦義村と結んで北条氏を打倒するための挙兵をした。だが、土壇場で三浦義村は北条方に与し、兵力不足のまま和田一族は將軍御所を襲撃し、鎌倉で市街戦を展開する。合戦は2日間にわたり続くが將軍実朝を擁し、兵力に勝る幕府軍が圧倒し、和田一族は力尽き、義盛は敗死した。

この合戦の勝利により、北条氏の執権体制はより強固なものとなる。

以上